エマソンのスウェーデンボルグ評：*Representative Men* と “Initial, Dæmonic, and Celestial Love”

小　田　敦　子

要　旨

Ralph Waldo Emerson の *Representative Men*（1850）はエマソンが「代表」と「表現」の観念を形成するのを助けた六人の「偉大な人々」を論じる。プラトン、スウェーデンボルグ、モンテーニュ、シェイクスピア、ナポレオン、ゲーテは人々の精神を代表すると同時に、それを表現した人々である。“Swedenborg; or, the Mystic “の章は、スウェーデンボルグの著作、*The Economy of the Animal Kingdom* がプラトンやネオプラトニストの観念論を自然科学の観点から更新したことを評価する。スウェーデンボルグの物質世界が精神世界を代表するという観察はエマソンに自然界における「人間の無限性」を教えた。

スウェーデンボルグはプラトンの「上昇する」愛の観念を受け継ぎ、“Natural, Spiritual, and Celestial” という三段階を設けた。一度はスウェーデンボルグを信奉した William Blake が *Marriage of Heaven and Hell*（1789）では段階を峻別することを批判したように、エマソンの詩、“Initial, Dæmonic and Celestial Love” もまた物質界と精神界との対応や代表関係、天地をつなぐ「真の天文学」を示すことでスウェーデンボルグの思想を更新したことを、三部構成の詩の第二部に「ダイモン」と「天」とが同時に現れる理由やキューピッドの目と天空との対応の描写を中心に検証する。

Ralph Waldo Emerson（1803-1882）の人物評伝、*Representative Men*（1850）は取り上げられる人物の選択からして必ずしも一般的な偉人伝とは言えず、エマソン自身にとって重要な人物を論じた、むしろエマソン自身の伝記と評され、時に揶揄されてきた。アメリカ下院（the House of Representatives）を表す言葉にも含まれる政治的な「代表（representative）」と同じ意味をはじめ、エマソンがこの言葉にこめた意味はその思想形成を知る上で興味深い。“Uses of Great Men” と題された序論の後、「代表的な人」としてプラトン、スウェーデンボルグ、モンテーニュ、シェイクスピア、ナポレオン、ゲーテが選ばれている。出版の基になった 1845 年ボストンでの講演シリーズを考える際には、シェイクスピアの次に、サーディ、ゲーテ、ナポレオン、フーリエの 8 人を候補にした時もあったが、最終的には、詩人エマソンに影響を与えたペルシアの詩人サーディと、物理理論を社会改革に連結しようとしたフーリエを外し、ゲーテで終わる構成にした。より誰もが認める偉人伝という形になったが、スウェーデンボルグという選択にはとりわけ異論が出るだろう。しかし、エマソン批評史においては、スウェーデンボルグは、エマソンへの影響という観点からは、プラトン、ネオ・プラトニストのプロティノスと並んで、最も頻繁に言及されてきた人物である。スウェーデンボルグは、エマソンにとって、西洋思想の王道であるプラトニズムの直近の更新者、特に科学的知見に基づく更新者として重要であり、その教義の一つである “Representation and Correspondence” がエマソンの「代表」という観念を裏打ちすることを再考したい。再考というのは、エマソンの思想がスウェーデンボルグの「自然と精神の対応」

に従っているということはよく知られているが、エマソンがそれを批判的に受容したという点については論じられることが少ない。そして、それに関連して、やはり植物学者としてのゲーテのエマソンへの影響ということも、ゲーテの英語圏への紹介者であるコールリッジやカーライルのエマソンへの影響の影に隠れがちである。*Representative Men* が取り上げるスウェーデンボルグからゲーテに通じる科学の時代におけるプラトニズムの変容という観点から、エマソンの批評、彼独自の思想を考えてみたい。

1.「同一性（Identity）」の哲学―マクロコズムとミクロコズムの「対応（Correspondence）」

Representative Men が取り上げるスウェーデンボルグ（1688-1772）の章（*Essays and Poems* 661-689）は "Swedenborg; or, the Mystic" と題されているが、エマソンが評価する作品は、「神秘家」が主に意味する、スウェーデンボルグが *Heaven and Hell*（1758）など後期の著作で神学や死後の霊界に傾倒する前の、科学者としての著作、『動物界の理法』（*The Economy of the Animal Kingdom*、原題 *Regnum animale* 1744-45 年出版）である。エマソンは、アリストテレス、ベーコンの系譜に連なる物理的自然界を探求したスウェーデンボルグに注目する。

> A colossal soul, he lies vast abroad on his times, uncomprehended by them, and requires a long focal distance to be seen; suggests, as Aristotle, Bacon, Selden, Humboldt, that a certain vastness of learning, or *quasi* omnipresence of the human soul in nature, is possible. His superb speculation, as from a tower, over nature and arts, without ever losing sight of the texture and sequence of things, almost realizes his own picture, in the "Principia," of the original integrity of man. (666)

スウェーデンボルグの「とびきり優秀な思索」は、ニュートン（1643-1727）のように、同時代の人が見ていなかった西洋文化圏を超える広く深い世界を見る目を持っていた、つまり、「人間の元々の高潔で完全な状態」（666）、「人間の魂が自然のなかに『疑似』偏在」（666）していることを示した点にあると考える。「偏在」は神の属性に帰せられる概念であり、人間の堕落を教義とするカルヴァン主義にはそれを人間に応用することは受け入れられないが、人間の神性を主張するエマソンには、自然界の法則への新しい知識は聖書が根拠とした世界観を変え、自然が堕落した存在ではなく、人間が精神的存在として十全に生きうる世界であることを教える、現実に根差した力強い科学的思索であった。「宇宙の最も高貴な絵」（667）を描いたスウェーデンボルグの「力（Power）」と区別される「形式（Forms）の教義」、「連続（Series）と段階（Degrees）の教義」、「流入（Influx）の教義」（667）によって、自然界の法則や秩序が説明され、科学によって人間の魂が解明される可能性、科学と精神とを結びつけたことをエマソンは高く評価した。

自然の研究が魂の研究になるというるスウェーデンボルグの思想を総括して、エマソンは「同一性の哲学（Identity-philosophy）」（668）と呼ぶ。人間を宇宙の中心として、すべての「もの」は有機的に関係しており、人間の身体は宇宙的、普遍的なものであり、また、それを認識する精神的主体として全宇宙と対応しているという思想である。エマソン自身が数々の例を挙げるように、これはプラトンも言及するミクロコズムとマクロコズムの対応であり、「古いアフォリズム、『自然はいつも自分自身に似ている』」（668）の近代的変奏であって、スウェーデンボルグの発明ではないが、スウェーデンボルグはそれを科学的に証明したために、スウェーデンボルグ独自の、彼を代表する思想だとエマソン

は捉えている。William Blake（1757-1827）の *The Marriage of Heaven and Hell*（1790-93）は、その題が容易にスウェーデンボルグの *Heaven and Hell* を連想させるように、自身が信奉していたスウェーデンボルグの教義や独自の思想の無さを批判した詩文集だが、ブレイクのよく知られた「一粒の砂に世界を見る」で始まる詩は、まさにスウェーデンボルグ的な大宇宙と小宇宙の「同一性」を表現するもので、スウェーデンボルグのその思想に魅力を感じたのがエマソンだけではないことを示している。

> To see a World in a Grain of Sand
> And a Heaven in a Wild Flower,
> Hold Infinity in the palm of your hand
> And Eternity in an hour. (“Auguries of Innocence” ll. 1-4) (*Blake* 431)

“Quotation and Originality”（1876）で引用者の役割を高く評価したエマソンはブレイクと違って独創性を過大評価せず、スウェーデンボルグが科学者としての視点から引用したことを評価し、大宇宙と小宇宙の対応が単なる文飾ではなく、動物の器官の機能の観察から実証できる事実であることを示した点に、新しい思想を認めている。そして、論の後半ではスウェーデンボルグがその後神学に傾倒して、自然に対する知見を狭くしたことを惜しむことになる。自己を超えた存在との内的合一を語る者は一般に「神秘家」と呼ばれるが、スウェーデンボルグに付された「神秘家」はそのキリスト教的自然観の限界への批判を含意する呼称である。

エマソンはスウェーデンボルグの独自性の無さを、彼が生まれた偉大な時代背景から弁護する。それは、エマソンの思想形成の背景として考えるだけでも、エマソンの言及する 1688 年生まれのスウェーデンボルグや、カール・フォン・リンネ（1707-78）、言及されていないが、ジャン・ジャック・ルソー（1712-78）、アダム・スミス（1723-90）、エマニュエル・カント（1724-1804）、ジェイムズ・ハットン（1726-97）、エラズマス・ダーウィン（1731-1802）など綺羅星のように天才たちが輩出した時代である。「ニュートンが『プリンキピア』を出版した年に生まれた」（667）と紹介されるスウェーデンボルグは、「強健なアリストテレス的方法 」（667）によって近代的な科学を構想した人々に数えられ、顕微鏡解剖学者で植物も研究したマルチェロ・マルピーギ（1628-94）が、ヒポクラテス以来の教義を継承して「自然は最小の物の中ですべて機能している」（667）と大小宇宙の対応を表明し、スウェーデンボルグの同時代人であり同国人でもあるリンネもまた、それを継承し変奏したことが例示される。

> Linnæus, his contemporary, was affirming, in his beautiful science, that “Nature is always like herself:” and lastly, the nobility of method, the largest application of principle, had been exhibited by Leibnitz and Christian Wolff, in cosmology; while Locke and Grotius had drawn the moral argument. (667)

科学者の系譜の最後には、「モナド」を論じたライプニッツ（1646-1716）やラテン語のドイツ語翻訳でも貢献したクリスティアン・ヴォルフ（1679-1754）の宇宙論、「自然権」を唱えたジョン・ロック（1632-1704）に「自然法の父」フーゴー・グローティウス（1583-1645）など、スウェーデンボルグの自然観察に影響したであろう科学者から哲学者まで広範な関係を描き出す。スウェーデンボルグは古代から繰り返し指摘されていた自然についての省察を背景に、近代科学の発達によって科学と人文学とが分離し始めた時代に、もう一度、科学と魂の問題とを一つにする可能性を示し、その「詩の最も高い文体で書かれた人間の身体の解剖学的記述」（671）にエマソンは大きな影響を受けた。

2.「同一性」からゲーテの「変態」、変化し生成する力へ

スウェーデンボルグの『動物界の理法』の「動物界」という用語は、自然には鉱物、植物、動物が存在するという当時の博物学の共通理解を基に、リンネの『植物の体系（*Systema Naturæ*）』（1735）が命名した植物界、動物界、鉱物界による。しかし、エマソンは植物と動物に類似性があることを示唆したマルピーギを繰り返し引用したように、エマソンはスウェーデンボルグの進化形として、大小宇宙の対応や自然の類似性と連続性を考える上で、リンネの分類よりもゲーテ（1749-1832）の『植物変態論』（1790）が明らかにした「変態」、自然の「変態する力」に関心を広げていく。1834 年にゲーテを読んだエマソンは「ゲーテは新しい創造だ」（*JMN* 4:282）、「『生きて動いている自然の理論』はまだない。それがあれば、それこそが真の『分類』になるだろう」（*JMN* 4:288-89）と最大級の讃辞を日記に書き、ゲーテの「原植物」が想定する同一性のみではなく、「原植物」の内包する変化、内在的な生成力に注目した。

> In the plant, the eye or germinative point opens to a leaf, then to another leaf, with a power of transforming the leaf into radicle, stamen …. In the animal, nature makes a vertebra, or a spine of vertebrae, and helps herself still by a new spine, with a limited power of modifying its form,—spine on spine, to the end of the world. A poetic anatomist, in our own day, teaches that a snake, being a horizontal line, and man, being an erect line, constitute a right angle; and, between the lines of this mystical quadrant, all animated beings find their place …. (668-69)

「目にあたる発芽点」が葉になり、葉が「小根や雄蕊」など他の器官に変形するというゲーテが見出した自然の理法は、E. エマソンの注によると、「エマソンの時代の詩的解剖学者」（669）ローレンツ・オーケン（1779-1851）に引き継がれ（*W* 196）、蛇と人間が同じものの「変態」であるという発見につながる。スウェーデンボルグの異なる種や器官に見いだされる「同一性」の哲学にゲーテの「変態」の観念を応用し、自然の生成力に注目したエマソンは、スウェーデンボルグの植物から動物への連続性と段階性をたどり上昇する力に、無限の精神的エネルギーを認めた。以下のスウェーデンボルグの「精神はより優れた身体である」に至る思想は、エマソンに精神がその観照の対照である自然なくして存在できず思考もできないこと、自然と精神とが切り離せないものであることを教えた。

> Nature recites her lesson once more in a higher mood. The mind is a finer body, and resumes its functions of feeding, digesting, absorbing, excluding, and generating, in a new and ethereal element. …. And there is no limit to this ascending scale, but series on series. ….We are adapted to infinity. We are hard to please, and love nothing which ends: and in nature is no end; but every thing, at the end of one use, is lifted into a superior, and the ascent of these things climbs into dæmonic and celestial natures. Creative force, like a musical composer, goes on unweariedly repeating a simple air or theme … till it fills earth and heaven with the chant. (669)

天へと「上昇する階段」や「より優れた性質」への永久の上昇運動は、プラトンやスウェーデンボルグの思想でもあるが、エマソンはその高みを「ダイモン的、天上的性質」と呼ぶことで、切り離された段階性ではなく、自然との連続性を主張する。自然の変容が無限であるように精神が無限であるこ

と、その物質的な変化を引き起こす「創造的な力」は精神の力でもあるので、「ダイモン的で天上的な性質」となり、天地を満たしていると言う。そして「地と天」を同一の「創造的な力」からなる自然として捉える見方は、エマソンをキリスト教神秘主義者スウェーデンボルグから離れて、自然の運動のみで完結する有機的全体的で進化論的な世界観に向かわせる。

ギリシア語「ダイモン」は「超自然的霊的存在」を指す語で、概ね、人間の運命の変転を左右する非人格的霊的存在として、よい霊にも悪い霊にもなるという性格を持つが、プラトンの『饗宴』では人と神との仲介者とされた。キリスト教では異教の神は、悪魔（デーモン）的なものと考えられたが、エマソンは「天上的」と組み合わせて「神性」に近いものとして使っている。詩 “The World-Soul” においても、ダイモンは「ジニアス［世界霊］の父で息子」(l. 84）と呼ばれ、「運命」の使い魔のように描かれている。ギリシア語の「ジニアス（genius)」は誕生時にそれぞれの人につく守護霊で、エマソンは霊的存在を表すのに好んで「ジニアス」を使うのも、キリスト教の「聖霊（the Holy Spirit)」に対し、地上性、自然の生成力に関わる言葉を選んでいると言えよう（小田 49-61)。

「ダイモン的天上的」という表現はエマソンが詩集 *Poems*（1847）に収めた三部構成の詩、“Initial, Dæmonic, and Celestial Love” の題にも使われている。この題がスウェーデンボルグの “Wisdom of Angels concerning Divine Love and Divine Wisdom”（1763）の中にも現れる「高度の三段階」、“Natural, Spiritual, and Celestial”（*Blake* 92）に由来することは、エマソンがエッセイ中でスウェーデンボルグの “Conjugal Love”（1768）を引用していることからも推測できる。プラトンの「愛」に及ばないとスウェーデンボルグのヘブライズムの限界が批判されたように、詩の題の言い換えにもエマソンのスウェーデンボルグ批判が見える。ブレイクの *The Marriage of Heaven and Hell* という題にも同様の批判が見えるが、エマソンも三段階を切り離して考えることに反対する。エマソンは自然界がそれを認識する人間の精神界でもあること、無限の創造力が働く場であることを主張しようとする。

プラトンの代表する古代ギリシアの「大宇宙と小宇宙の対応」を科学的に実証、更新したスウェーデンボルグは、*Nature*（1836）の冒頭で「自然の流動（the flowing of nature)」を知っていた人として描かれるターレスやプロティノスの「流動」、「流入の教義」の元となるネオ・プラトニズムの「霊的な流動」を、「自然の流動」として再定義したとエマソンは考えている。

> Few knew as much about nature and her subtle manners, or expressed more subtly her goings. He thought as large a demand is made on our faith by nature, as by miracles. “He noted that in her proceedings from first principles through her several subordinations, there was no state through which she did not pass, as if her path lay through all things.” (671)

スウェーデンボルグは、信仰は「奇跡」ではなく「自然」によっても可能だと考えたとエマソンは説明して、自然の原則がすべてに流入していくという記述を引用する。霊的なものの流動が動植物の生理現象から納得されている。「自然の流動」は内面化されると見えなくなるので、自然の足取りを追う際、科学をガイドにする必要がある」（671）というスウェーデンボルグをエマソンは支持する。身体器官の大きな単位は小さな単位と対応しているという科学的知見が、以下のような「人は一種微小な天である」「神は偉大な人である」というスウェーデンボルグの神学になることも、キリスト教では認められない考えだが、人に神性を認めるエマソンは肯定的にとらえている。

> It is a key to his theology also. “Man is a kind of very minute heaven, corresponding to the world of spirits

and to heaven. Every particular idea of man, and every affection, yea, every smallest part of his affection, is an image and effigy of him. A spirit may be known from only a single thought. God is the grand man." (672-73)

人間の生命は神の愛が「自然界」に形を与えたものであり，愛である生命は「霊界」、「天界」にも対応している。神的な生命をもつ人間の「思考」や「情愛」は神の似姿であり、大きな霊的愛を受け取ることのできる人間は、神であるというスウェーデンボルグの大胆な主張から、エマソンの「ダイモン的、天上的愛」はキリスト教の神概念を除いて、自然界における「愛」の「創造的な力」(669)、生物的な生成力を受けとる。『動物界』で提示された自然は精神の「代表（Representation)」であり、精神に「対応（Correspondence)」するという考えは、人間の精神の無限性を担保するものであり、「もの」に代わってその「精神」を表現するものとしての言葉への考察、エマソンの「象徴（symbolism)」の言語観となった。

"In our doctrine of Representation and Correspondence, we shall treat of both these symbolical and typical resemblances, and of the astonishing things which occur, I will not say, in the living body only, but throughout nature, and which correspond so entirely to supreme and spiritual things, that one would swear that the physical world was purely symbolical of the spiritual world …. This symbolism pervades the living body." (673)

スウェーデンボルグが、自然界の真実は霊界や天界の真実に対応するという「ものの象徴主義」(674) を、はじめて科学的に記述したことをエマソンは言祝ぐが、この科学者が聖書の硬直的な解釈、自然界より霊界、死後の世界へと比重を移していくことを「乱心（a deranged balance)」(675) とみなし、彼の分析的で自発性に欠ける自然認識を「人間的でも普遍的でもなく、神秘的でヘブライ的だ」(676) と批判して以下のように続ける。

He fastens each natural objects to a theologic notion; ― a horse signifies carnal understanding; a tree, perception ….The slippery Proteus is not so easily caught. In nature, each individual symbol plays innumerable parts, as each particle of matter circulates in turn through every system. The central identity enables any one symbol to express successively all the qualities and shades of real being. In the transmission of the heavenly waters, every hose fits every hydrant. Nature avenges herself speedily on the hard pedantry that would chain her waves. She is no literalist. Every thing must be taken genially, and we must be at the top of our condition, to understand any thing rightly. (676)

「自然の波に鎖をつける」という言い方が示すように、エマソンはスウェーデンボルグの神学的偏向がせっかく彼が教会に持ち込んだ豊かな自然の「流動」の解釈を狭くしたことを惜しむ。前出の "Conjugal Love" の永続的な流動性に欠ける愛を批判し、天国や地獄の観念を陰鬱な「ゴシック神学（Gothic theology)」(685)、彼の天使は高い観念に欠けた「田舎牧師」(687) だと、その硬直性を批判する。スウェーデンボルグに欠けたキリスト教に捕らわれない思考をしたのがモンテーニュであり、自然の豊かな象徴性をとらえる詩を書いたのがシェイクスピアであり、その延長線上に自らも属することをエマソンは望んだ。そのひとつの試みとして、"Initial, Dæmonic, and Celestial Love" を読むことができる。

3. “Initial, Dæmonic, and Celestial Love” が描く「代表」と「対応」

Poems（1847）に収められた詩 “Initial, Dæmonic, and Celestial Love” はわかりにくく、取り上げられることの少ない詩である。2015 年出版の *Cambridge Companion to American Poets* で “Ralph Waldo Emerson” の章を担当した Mark Scott がこの詩を論じたのは驚きであった。本論のテーマに関わるプラトンの影響という論点からは、John S. Harrison が第一部を序論とみなし、第二・三部に限定して、低い愛から高い愛へと上昇するプラトニズムの系譜を古代ギリシャから 17 世紀ケンブリッジ・プラトニストにたどり、特に、『饗宴』でソクラテスが論じた “Dæmon” の主題を詳述した（Harrison 146-155）。Harrison の著書の意図は、エマソンの超越主義がドイツ哲学に、その神秘主義がインド思想に起源を求められるのに対し、ギリシア思想の重要性を論証しようとするものであった。エマソンの詩の研究者、Carl F. Strauch は、そのうえで第一部、“Initial Love” について、19 世紀のジャーナリスト Franklin S, Sanborn の Cupid にエマソンの好んだ Pan の生命力を重ねる指摘に触発され、エマソンが彼の宇宙生成論とも言える長詩、“Woodnotes II” に登場する「急進する変容」である Pan のような自然の不可思議な生成力を表現していることを、エリザベス朝の大詩人スペンサーをはじめそれまでの文学が描いた Cupid 像をいかに変容させたかという観点から検証し、詳細に論じた。Strauch の Cupid は半神半人である「ダイモン」として、単に伝統的な「子供の神」ではない「理性、運命、自然」の力を暗示し、それが詩の全体を繋いでいることを論じる。本稿はその変容が、エマソン直近のプラトニズムの更新者、スウェーデンボルグをさらに更新した、エマソン自身の「代表」と「対応」の思想として表現されていることを明らかにしたい。それは Harrison が乗り越えようとしたドイツ神秘主義や東方思想の再評価とも言えるだろう。

エマソンのタイトルはスウェーデンボルグの三段階のうち “Natural” と “Spiritual” を “Initial” と “Dæmonic” に言い換え、最後の “Celestial” は両者共通である。そして、三部構成から成る詩の、第一部に “The Initial Love”、第二部に “The Dæmonic and the Celestial Love” と題を与え、第三部は無題という変則的な章分けをしている。1876 年に家族や友人の協力で *Selected Poems* が出版されたときには、第二部と第三部にそれぞれ別々に “Dæmonic” と “Celestial” が与えられ、第二部の「神」の発言部分が第三部に移されるなど、エマソンの意図とは言い切れない変更が加えられており、本稿では初版がよりスウェーデンボルグ批判の意図を明確に示していると考え、初版によって論じていく。

まず、この章建ての不均衡には前述したスウェーデンボルグの硬直した体系への反論があるだろう。ブレイクの *The Marriage of Heaven and Hell* はスウェーデンボルグ批評として知られていたが、エマソンはブレイクの作品集や伝記が出る 1860 年代までブレイクをよく認識していないので、直接の影響関係はないだろう。ブレイクの神の国と人間の領域である地獄とを結びつけ、「知性（Reason）」に従う「善」と生命のエネルギーに属する「悪」とを結び、「地獄の格言」（“Proverbs of Hell”）に賢者の声を見るという試みは、エマソンの神と人とをつなぐ「ダイモンの愛」と「天」を一体化することで明示された、天が人間界から独立したものではないという主張に似ている。スウェーデンボルグの主張した小宇宙と大宇宙は対応し、高い世界への段階的な上昇、高い世界は円運動でできているという循環性や流動性を基礎とする自然の世界、スウェーデンボルグの神学が停止させてしまった流動性をあくまで流動の世界として表現しようとする試みが “Initial, Dæmonic, and Celestial Love” である。

I. "The Initial Love"

エマソンの Cupid は現代人の姿をしている。時代は変わり商工業者に「特許」の概念が生まれる時代、ギリシア神話の「馬鹿げた古代の専売特許物（foolish antique patent)」(I 10）を身に着けてはいない。「目」に特徴がある。

Boy no more, he wears all coats,
Frocks, and blouses, capes, capotes;
・・・
Leave his weeds and heed his eyes, ―
Al the rest he can disguise.
In the pit of his eye's spark
Would bring back day if it were dark;
・・・
In those unfathomable orbs
Every function he absorbs. (I 15-26)

最早男の子でさえなく、男女別なく様々な衣装で偽装するが、Cupid であることは「目」でわかるという。深い「眼球」には内から発する光があり、そこに大小宇宙の「同一性」と「対応」による様々な機能が宿る。ゲーテの言う「目にあたる発芽点」、或いは「原植物」と同じように「愛」の創造する力を象徴している。目と目を見かわすだけで精神の交感が可能なことは別の詩 "The Visit" でも印象的に描かれたが、ここでも同様に「キョロキョロ彷徨う大胆な眼球」(I 36）は駿馬のように駆け回り、他の目に飛びかかる。

And round their circles is writ,
Plainer than the day,
Underneath, within, above, ―
Love－love－love－love.
He lives in his eyes;
・・・
He rolls them with delighted motion,
Joy-tides swell their mimic ocean. (I 41-49)

様々に形を変える Cupid は、「目の中に住んで」いて、上機嫌で目を動かす様子は「喜びの潮が目が真似る海を膨らませる」と前出の海神プロテウスを連想させ、*Nature*（1836）で「透明な眼球（transparent eyeball)」と地平線が「対応」していたように、水平線の弧を描く地球と Cupid の眼球とは対応しており、世界と一体化した存在として表現される。大小の球体をつなぐ、世界を流動する「力」である「愛」の化身、愛を「代表・表象する」ものが Cupid の目であることがわかる。

Cupid の目を "the Initial Love" と呼ぶのは、エマソンの「円」の思想による。エッセイ "Circles" は以下のように始まる。

> The eye is the first circle; the horizon which it forms is the second; and throughout nature this primary figure is repeated without end. It is the highest emblem in the cipher of the world. St. Augustine described the nature of God as a circle whose centre was everywhere, and its circumference nowhere. (*E&P* 403)

エマソンがスウェーデンボルグを継承するのは、科学的に証明された小宇宙と大宇宙の対応の思想だが、このエッセイではアウグスティヌスの「神の本性は円」であるという初期キリスト教からの支持も受け、「自然界は同心円のシステムとして考えられるかもしれない」（*E&P* 409）とスウェーデンボルグが動物に認めた同一性の法則をゲーテ以後の生命観、世界観へと移行させる。そして「親和力（Elective Affinities）」（*E&P* 410）という錬金術の化学物質間の親和性を表す用語を結婚の心理や感情に応用したゲーテを念頭に、しかし、物質と精神とに同様に働く「親和力」が最終的な原理ではないと述べる。

> Yet is that statement approximate also, and not final. Omnipresence is a higher fact. Not through subtle, subterranean channels need friend and fact be drawn to their counterpart, but rightly considered, these things proceed from the eternal generation of the soul. Cause and effect are two sides of one fact. (*E&P* 410)

「親和力」も「偏在」する力の一部、「永遠の生成」の一部であり、Cupid の愛についても同様である。彼の愛が「最初の愛（the Initial Love）」と呼ばれる所以は、エッセイ “Circles” では以下のようにも説明される。

> There is no virtue which is final; all are initial. The virtues of society are vices of the saint. (*E&P* 411)

Cupid の愛は世界の円環システムの中で流動していくものであり、様々な形をとりながら、それが大宇宙である「偏在」と連環していくことにより、彼は「神」と呼ばれる資格を持つ。それが、「ダイモン」とという呼称、「ダイモン」と「天」とが一体化した章題に示されている。第一部においても、Cupid は神に比せられ、その様々に「仮装」する小宇宙的存在は「星々」の大宇宙を抱きしめる。“Godlike” 以下の 4 行は *Selected Poems* 以降の版では削除された。

> There is no mask but he will wear;
> He invented oaths to swear;
> He paints, he carves, he chants, he prays,
> And holds all stars in his embrace,
> Godlike, ― but ’tis for his fine pelf,
> The social quintessence of self.
> Well said I he is hypocrite,
> And folly the end of his subtle wit!
> ・・・
> For he is sovereignly allied, ―
> Heaven’s oldest blood flows in his side, ― (I 114-127)

削除された 4 行はわかりにくい部分だが、Cupid が神のようである理由は、彼が様々な姿形を取りうること、彼の「自己」は「社会的な」、つまり、世界の円環システムにより、様々なものと結びつくことを精髄とするからだと解釈できよう。「天のいちばん古い血が彼の脇腹に流れている」というアダムとイヴの創造を変形させたような表現も、天つまり宇宙との物理的連続性、自然の流動から生まれた最初から最終への過渡的、流動的存在であることを語っている。そのため、彼の精神もまた流動の中にあって、知恵から出たことが愚行に終わる「偽善者」とならざるをえない。“The Visit” のアフォリズム的な最終行、

If Love his moment overstay,
Hatred’s swift repulsions play. (ll. 29-30)

この愛も「偽善者」で、目と目が見交わす一瞬を越えて愛が長居をすると、愛は憎悪に変わるということも同じ流動性を表現している。最終的に固定されるものはなく、真実は「移行（transition）」にあるというのがエマソンのスウェーデンボルグ批判であった（682）。このような「移行」を象徴するのが人と神との懸け橋「ダイモン」である。

II. The Dæmonic and the Celestial Love

土でできた人間の血縁の世界から天への階段を上昇していくことを可能にするのが、人の頭上に広がる「ダイモンの地平」である。

Right above their heads,
The potent plain of Dæmons spreads.
Stands to each human soul its own,
For watch, and ward, and furtherance,
In the snares of Nature’s dance; (II 51-55)

この描写からエマソンの「ダイモン」は個々人の守護霊（genius）として考えれていることがわかる。「ダイモン」はオーラの輝きのように不可視の形をとり、「愛」あるいは「世界霊魂（the World-Soul）」の意味で使われる大文字の “Genius” の受け入れ口となる。しかし、人がそれに気づく機会の少ないことは、彗星のシャワーがひとり夜に航海する男に降り注ぐという稀な天地の一体化の経験として語られる（II 80-81）。守護霊の在り方は人によって様々である。“The Dæmonic Love” では、Cupid に与えられた「ダイモン」は「神性のより少ない」（II 116）もので、彼のバラはすぐに色あせ、彼のダイモンは自分に似たものを求め、壁で囲い込むことを好む。第二部の最後は、「ダイモン的愛は / 戦争の祖先であり / 悔恨の親である」（II 159-161）で終わるように地上的な存在である。

スウェーデンボルグが “Spiritual” と呼んだ段階をエマソンは “Dæmonic” と呼ぶことで、神の霊よりも地上的な自然を強調するものにした。Cupid に手相見や占星術などジプシー的な能力が与えられていることもダイモンの土俗的、魔神的性質を強調する。いわゆる異教的な「堕落した自然」につながる両面性を持った存在として現れるが、反面、第二部の中でもより神的な「ダイモン」にとっての「愛」は、間違った画家が描いたように「盲目」ではなく、「至高の愛はすべてのものの上に輝く」（II 95）太陽として示される。そして第三部ではその至高の愛のヴィジョンが「太陽や星を越えた純粋な

領域」に上昇していくが、それは自然という化身から知るほかないものである。エマソンが第三部に題を与えず、それ自身としては語りえないものであることを示す空白として残したことには意味がある。エマソンが *Essays: Second Series* 所収の “Nature” で、「松の木や川、目の前の花咲く土手は自然のようには見えない。自然はまだどこか別のところにある」（*E&P* 553）と言った「自然」が、この無題に表現されている。

Higher far,
Upward into the pure realm,
Over sun and star,
Over the flickering Dæmon film,
Thou must mount for love;
Into vision where all form
In one only form dissolves;
In a region where the wheel
On which all beings ride
Visibly revolves;
Where the starred, eternal worm
Girds the world with bound and term;
Where unlike things are like; (III 162-174)

「天」に当たる「純粋な領域」は「眼球」のような形を持つものの領域ではなく、「視力」、目に見えるものの円環運動を生む力が見える視力の世界、「純粋理性」の世界である。その円環運動は「星にされた、永遠の虫が世界を限界と期限の帯で囲む」と言い換えられるが、この循環する星座の「さそり座」を暗示する表現は、Cupid の眼球という小宇宙が大宇宙を映していたのとは反対に、大宇宙から小宇宙を見ているような視点を現出させる。続く、「区切られ異なって見えるものが同じであるところ」は、エマソンがバリの植物園でサソリと自分のように違うものが同じであると発見したところから（*JMN* 4: 199-200）、地質学が教える地球の変化の長い時間に思い至るという “Nature” の記述（*E&P* 546-47）を連想させる。自然の生成力の発生源として「天」が描かれていることは、下界では別々に分けられているものが頂点では一つになるという過程に、以下のように進化に必要な天文学的時間を介在させていることからもわかる。

There the holy essence rolls,
One through separated souls;
And the sunny Aeon sleeps
Folding Nature in its deeps: (III 182-85)

神の永遠に変わる、天文学や地質学が明らかにした自然が体現する「100 億年」という無限のように長い時間が、「原植物」的な「原型」（III 189）が開花して、地上を天上に変える可能性を示唆する。

バニヤンの『天路歴程』（1678）の巡礼は十字架を見て、重荷から解放されたが、エマソンは天球を仰ぎ見る地上の人間が「真の天文学」を見ることで重荷を下ろすと言う。

O、what a load
Of care and toil,
By lying use bestowed,
From his shoulders falls who sees
The true astronomy,
The period of peace. (III 199-204)

「真の天文学」という言葉は、“Initial, Dæmonic, and Celestial Love”の詩全体を通して繰り返し現れた星空が単なる文飾ではなく、Cupid の「目」と対応し、地上の海とも対応し、空の海として、「その海の多くの円は、原因を公表し、そして隠している法則だ」（III 194-95）という事実を代表し、地上の自然が自然の流動の原因である天上を表現するものであることを暗示する。エマソンはスウェーデンボルグの科学で精神を説明するという方法を徹底させ、当時の最新科学である天文学や地質学が明らかにする進化論的な自然から、精神を解明しようとする姿勢を「真の天文学」に代表させた。それはカントの『実践理性批判』の中の有名な言葉、「わが上なる星のまたたく大空とわが内なる道徳律」を信頼するという思想と似ている。カントもスウェーデンボルグから精神を語る方法について学んだという（Thorpe 52）。しかし、ゲーテが継承することになるキリスト教を逸脱するドイツ・ロマン派の科学と精神とを関係づける有機的な生命観には賛同しなかった（Richards 229-37）。Strauch は Cupid が体現する力の背景を次のように説明していた。

It provides an excellent example of Emerson’s vision of the upward thrust of cultural evolution from palmistry, magic, and the like to Reason (the Kantian *Vernunft*), Fate (from Classical sources, Stoic and Neo-Platonic), and Nature (Classical, Stoic, and modern Romantic). (58)

古今東西の思想を渉猟したエマソンの思想は、同時代の思想によって科学的に更新される。共に科学者でもあったが、カント以上にゲーテの進化論につながる自然界での創造的な生命観にエマソンの思想は支えられている。そして彼らの先達としてその方向へ進ませたのは、スウェーデンボルグの自然科学であった。

* 本研究は JSPS 科研費（JP18K00413）の助成を受けたものである。

引用文献

Blake, William. “Annotations to Swedenborg’s Wisdom of Angels Concerning Divine Love and Divine Wisdom.” *Blake: Complete Writings with Variant Readings*, edited by Geoffrey Keynes, Oxford UP, 1976, pp. 89-96.

Emerson, Ralph Waldo. *Emerson: Essays and Poems*. Edited by Joel Porte, Harold Bloom and Paul Kane, Library of America, 1983.

---. *The Journals and Miscellaneous Notebooks of Ralph Waldo Emerson*. Edited by William H. Gilman et al., Harvard UP, 1960-82. 16 vols.

---. *Representative Men: Seven Lectures. The Collected Works of Ralph Waldo Emerson*, vol. 4, edited by Wallace E. Williams and Douglas Emory Wilson. The Belknap P of Harvard UP, 1987.

---. *Representative Men: Seven Lectures. The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*, vol. 4. Edited by Edward Waldo

Emerson. Centenary Edition. Houghton, Mifflin and Company, 1903-04.

Harrison, John S. *The Teachers of Emerson*. Haskell House, 1910.

Richard, Robert J. *The Romantic Conception of Life*. U of Chicago P, 2002.

Scott, Mark. “Ralph Waldo Emerson.” *The Cambridge Companion to American Poetry*, edited by Mark Richardson, Cambridge UP, 2015, pp. 61-76.

Strauch, Carl F. “Emerson’s Adaptation of Myth in “The Initial Love.” *ATQ: The American Transcendental Quarterly: A Journal of New England Writers*, vol. 25, 1975, pp. 51-65.

Thorpe, Lucas. “The Realm of Ends as a Community of Spirits: Kant and Swedenborg on the Kingdom of Heaven and the Cleansing of the Doors of Perception.” *The Heythorp Journal*, vol. 52, 2011, pp. 52-75.

小田敦子 「エマスンの『自然』における “Spirit” と “Genius”」三重大学 *Philologia* 第 44 巻　2013　pp. 49-61

小　田　敦　子

Emerson on Swedenborg: *Representative Men* and "Initial, Dæmonic, and Celestial Love"

Atsuko ODA

Abstract

Ralph Waldo Emerson's *Representative Men* (1850) deals with six "great men" who show how Emerson's idea of "representative" was conceived. Each of the six—Plato, Swedenborg, Montaigne, Shakespeare, Napoleon and Goethe—is in fact representative of many people. Emerson uses each great man to express or represent what they thought with regard to their common humanity. The chapter "Swedenborg; or, the Mystic" argues that Swedenborg renewed the Idealism of Plato and Neo-Platonists in terms of modern science. While Emerson designates Swedenborg as "the mystic," he actually esteems Swedenborg more highly as a naturalist than as a mystic talking on a heavenly world. Swedenborg's *The Economy of the Animal Kingdom* (1744-45) convinced Emerson of the force and law of this material world as representative of and corresponding to that of the spirit. Swedenborg proved Plato's correspondence between microcosm and macrocosm scientifically, and inspired Emerson on the possibility of man's infinitude in nature or that "God is the grand man."

Swedenborg inherits the Platonic idea of the ascension of love and sets three Degrees of Altitude: Natural, Spiritual and Celestial. As William Blake, once a Swedenborgian, criticized Swedenborg's strict division of man's life as is suggested in his poem, *Marriage of Heaven and Hell* (1789), Emerson's poem "Initial, Dæmonic, and Celestial Love" aims to show the fusion or correspondence between matter and spirit, the "true astronomy" existing in this world and universe. Cupid's initial love and Emerson's emphasis on his eye presents an image of man dissolved in the arc of the starry heaven. Dæmon comes from Socrates's idea of a demi-god who bridges between man and god. Emerson does not separate "Dæmonic" from "Celestial" as suggested by the discrepancy in chapter titles: Chapter 2 includes those two words while Chapter 3 has no title. Dæmon could be a genius, a personal guardian angel working in this world and at the same time part of Genius or the World-Soul. Though the terms seem both Platonic and Swedenborgian, Emerson invents a better sense of circulation and economy of the natural world than Swedenborg achieved.